



## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 178号 2010.10.20 発行 社会政策研究所

=====

1年前から時々毎日新聞に掲載される「ネコのあくび」。

育成会ではおなじみの野沢和弘さんの珠玉の文からいくつか紹介します。【kobi】

### 毎日新聞 ネコのあくび

#### もうひとつの美術館 8月14日

強烈な夏の日が照りつける。古い木造校舎から懐かしいにおいがした。ここは栃木県那珂川町。里山の中腹に「もうひとつの美術館」がある。明治から大正期に建てられた小学校が廃校になり、梶原紀子さんが建築家の夫と開設した。

美術系大学を出て設計事務所などで働いていた梶原さんだったが、2番目の子に自閉症という障害があることがわかり療育にかかりきりになった。障害者のアート作品に出会い、正直な感性や生きる力強さに衝撃を受けたことが自らを見つめ直すきっかけになったという。

知的障害のある人たちを一方向的に社会に引き込むだけでなく、個性として彼らの世界を認めよう。彼らの存在がポジティブに認められるよう社会に働きかけていこう。そんな思いを抱き、98年に東京から家族で移住した。「もうひとつの美術館」は来年開設10年を迎える。年に3回の企画展、ワークショップなどを開催しているが、入場料だけでは建物の保全・管理費を賄い切れず、寄付を募っている。(電話0287・92・8088 mob@nactv.ne.jp)

この夏の企画展「アート&クラフト&グッズ」では絵画や陶芸作品にまじって、障害者のアートを取り入れた服、靴下、パンツ、バッグなどユニークな作品が展示されている。古い教室にたたずんで作品を見つめていると、どこからか子どもたちの笑い声が聞こえてくるような気がした。

このコラムの挿絵の作者である伊賀高史さんの作品も展示され、人気を集めていたことを読者の皆さんにお知らせしておきたい。【野沢和弘】

#### 丸の内にて 9月8日

夏休み中の子どもたちがお父さんやお母さんの働いている職場を訪ねる。みずほコーポレート銀行の「子ども参観日」を見に行ったら。本物の1億円を持つ体験や昔の貨幣について学んだ子どもたち50人以上が会議室に集合した。父母たちも遅れてやってきた。

「ぜひこの機会に私たちの仲間を知ってほしくて来てもらいました」。担当社員はそう言うと、目の不自由な人や車いすの人を紹介した。いずれも同社の社員だ。目の不自由な男性はヘルスケアセンターで社員にマッサージをしている。仕事が終わると柔道の練習だ。パラリンピック出場を目指しているという。

青色ジャケットを着た4人の女性も紹介された。いずれも知的障害がある。7月からト

ライアル雇用として東京・丸の内の本社で働いている。元気な声で自己紹介する様子を子どもたちが真剣な顔で見つめている。パソコン入力や郵便物を運んだり、資料をシュレッダーにかけたりしている。各職場を回ってプリンターに用紙を補充するのも大事な仕事だ。オフィスの空気を青色ジャケットの女性たちがやわらかくする。

「みんな本当によく仕事をする。もっと大勢採用するのだった。机を並べて仕事をしている担当者は笑った。

都心で働く知的障害者のことは以前にもこのコラムで紹介した。今、ものすごい高齢化が都会で起きている。人類が初めて経験する超高齢社会の最先端を日本は走っているのだ。成熟した時代にふさわしい価値観を私たちは見つけないといけない。そのヒントがここにあるような気がしてならない。【野沢和弘】

### ウィング先生 9月18日

「モーツァルト、バッハ、ベートーベン。ほんのちょっと聞いただけですぐに曲名を言えました。娘はとてもクラシックが好きだったんです。今年3月、ロンドン郊外の研究室を訪ねると、穏やかな顔でローナ・ウィング先生は迎えてくれた。

自らも自閉症の娘を持つ母として、イギリス自閉症協会の設立にかかわった。「アスペルガー症候群」「自閉症スペクトラム(連続体)」という概念を提唱し、今日の自閉症研究の土台を築いた偉大な研究者なのである。

「音楽のほかに娘さんは何が好きだったのですか？」

「パンダ、ティーポット、電車に乗ること。おたくの息子さんは？」

「ロックを聴くこと、自転車、食べることです」

「うちの娘は乗馬も好きでした」

「うちの息子は風呂に入ることも好きです」

「うちの娘は水泳がとても好きでした」

ウィング先生と私のやり取りを、同行した内山登紀夫医師(福島大教授)が笑って眺めている。80年代のころまで日本では自閉症への誤解がよく見られた。「親の愛情が足りない」「しつけがなっていない」。そんな言葉で傷つけられる親は多かった。日本の研究者たちは海外の進んだ実践を懸命に取り入れた。ウィング先生の元にも日本の若い研究者が訪ねた。内山医師はその一人である。

「親と親はすぐに通じるものがありますね」。数年前に娘さんを亡くしたウィング先生はほほ笑んだ。少し寂しそうな横顔を冬の日がやさしく包んでいた。【野沢和弘】

### ともだち 10月6日

いつもと違うとどうしていいかわからなくなる。心の中にあるものをうまく伝えられない。そんなとき、つねる。乱暴でもなければ、意地悪なのでもない。

言葉が話せないせいなのか。自閉症の世界でのコミュニケーションかもしれない。しかし、つねられると痛い。家族ならがまんもできるが、ともだちにやらなければいいな。そう思っていた。

養護学校の入学式の写真は最前列の真ん中、校長先生のひざの上に座って写っている。時々、近くの小学校の児童と交流学級をするという。「交流」といっても、話さないし、じっとしているのが苦手な長男のことだ。子どもたちは手を焼いているに違いなかった。つねったりしないか、いじめられたりしないか。心配だった。

ある日、学校からの連絡帳に子どもたちの作文がはさんであった。交流学級の感想だった。その一つにこう書いてあった。

<手をつねられた。痛かった。赤くなった>

あ、やっぱり。その子は世話を焼いてくれたのだろう。いらいらした長男がつねったに

違う。しかし、わざわざ連絡帳にはさんで親に見せなくても……。謝罪しろということなのか。少しムッとした。でも、幼い文字はこんなふうが続いていた。

<赤くなったのは、ともだちになれたしるしです>

たしかにそう書いてあった。何度も読み返した。これを見せたかったのか。ちょっとうれしそうな先生の顔が浮かんだ。

大ニュースはないけれど、ネコのあくびみたいなことを書きます。【野沢和弘】

## 好きになれとは言わないけれど 10月20日

「なにをどうしても絶対にダメ」という人はほんの一握り。そのまわりには「みんなが反対というから私も反対」「どちらでもいい」と思っている人たちがいる。もっと多いのは「本当は反対したくない」と思いながら声に出せない人たちだ。

と、障害者施設の建設に反対する地域住民について研究した大学教授から聞いたことがある。「絶対にダメ」というリーダーを説得しようとしてもうまくいかない。なんとかしてあげたいと思っている多数派を信じて、感情的にならずに理解を広げていくしかないというのだ。

そうはいつでも感情的にならずにはいられない。民家を改装した小さなグループホームでも反対されるのだ。かつては地域住民の同意書が必要とされていたが、さすがにそれはなくなった。それでも「地域への説明」は必要とされている。しかし、説明会をするとそれがきっかけで反対運動が起きたりするので、事態はあまり変わらない。

だいたい、ある地域に住もうとするとき、その地域の人々に説明しなければならない人がどこにいるのだろう。ダムや道路をつくる時は行政が説明会をするのに、障害者が暮らす家は どうして障害者や事業者が矢面に立たされなければならないのか。

障害のある人のことを好きになってくれとは言わないけれど、嫌いな相手がどこに住もうとも反対する権利が誰にあるというのだろうか。たとえあなたが障害者を嫌いでも、その人のことが心配でたまらない家族がいる。だれよりも大切に思っている人たちがいるのだ。【野沢和弘】

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行